

Title	ベルクソンにおける経験的オプティミズムと悪
Sub Title	L'optimisme empirique et le mal chez Bergson
Author	西山, 晃生(Nishiyama, Teruo)
Publisher	慶應義塾大学倫理学研究会
Publication year	2021
Jtitle	エティカ (Ethica). Vol.14, (2021.) ,p.61- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20210000-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ベルクソンにおける経験的オプティミズムと悪

西山晃生

はじめに

ベルクソンの生前刊行された著作には、概ね本文の行論に沿った小見出しが付されている。この小見出しについては、ベルクソン本人の手によるものかどうかも含め不明な点が多く、また内容上適切だと思われる箇所と多少離れたところに置かれることもあるので全面的に依拠することは危険だが、議論を整理するうえでの目安にはなる。

本稿で主題として扱うのは、『道徳と宗教の二源泉』（1932、以下『二源泉』と略記する）第3章末尾近くの、「悪の問題」という小見出しがついた箇所（DS 274-9）である¹。詳しくは後述するが、ベルクソンは『二源泉』を発表する二十年以上前から悪の問題を意識しながら、公刊された著作や論文で取り上げることはなかった。したがって、『二源泉』の（そして事後的に見ればベルクソン哲学全体の）結論とも言えるこの箇所で悪について論じられることの意義は大きい。そのように期待して読み進めると、以下に挙げるいくつかの点で失望する（あるいは理解しがたいと

1 ベルクソンの著作からの引用は、以下の略号の後に *Quadrige* 版の頁数を付した。

MM: *Matière et mémoire*, 1896

EC: *L'évolution créatrice*, 1907

ES: *L'énergie spirituelle*, 1919

DS: *Les Deux Sources de la morale et de la religion*, 1932

講義からの引用は、以下の略号の後に頁数を付した。

C1: *Cours I*, PUF, 1990

感じる) かもしれない。

第一に、そもそも悪について十分な説明がなされていない点。この箇所、悪は苦痛とほぼ同一視されているように見える。今日の読者は、ベルクソンが講義においてライブニッツによる悪の三分類（形而上学的悪、自然の悪、道徳的悪）を取り上げた²ことを知っているだけに、こうした限定は意外である。もちろん、講義は必ずしもベルクソン自身の立場を示しているわけではないが、それにしてもここで苦痛だけを悪として取り上げる理由についてまったく触れられていないのは不可解に見える。

第二に、悪以外のものが話題の中心になっている点。この箇所、主題的に論じられているのは、ベルクソンが「経験的オプティミズム」と呼ぶ立場である。悪はこの経験的オプティミズムを擁護するための、いわば敵役として導入されているようにも映る。

第三に、悪と経験的オプティミズムとの関係が明らかにされていない点。ベルクソンは解消することも他の何かに還元することもできない悪の実在を認めている。そのとき、オプティミズムがどのような形で成り立つのか、定かではない。

以上のように、経験的オプティミズムと悪をめぐるベルクソンの議論は様々な点で容易には理解しがたい。もっとも、オプティミズムそのものの主張は比較的明確である。「生命は全体として善いものである」(DS 277) こと、そして生命全体の中で人間が価値と存在意義を持つことの肯定である³。

本稿は、生命と人間に関するベルクソンの議論を検討しながら、経験的オプティミズムと悪との関係を明らかにすることを目指す。構成は以下のとおりである。第1節では『創造的進化』(1907、以下『進化』)と略記す

2 C I 379.

3 「このような地位を人間に、このような意味を生命に付与する以上、それ〔ベルクソンの議論〕は非常にオプティミスティックに映るだろう」(DS 276、強調は引用者)。

る)における生命と人間の位置づけを概観する。第2節と第3節で、『二源泉』における(どちらかと言えば)否定的な人間観と肯定的な人間観をそれぞれ確認する。以上を踏まえて第4節において経験的オプティミズムと悪について言及される箇所を検討する。

第1節 創造としての生命

ベルクソンにとって、生命の進化とは「予見不可能な形態の連続的な創造」(EC 30)「絶えず更新される創造」(EC 104)である。もちろん、そのことを証明できるわけではない。『進化』第1章の議論は多岐にわたっているが、その多くは創造の性質を明らかにすること、そして進化が創造としてしか理解できないという見方を正当化することに向けられている。出発点は次のような仮説である。

…生命は、その起源からただ一つの同じ弾み *élan* が連続したものであり、この弾みは進化の相異なる諸線へと分かれた。(EC 53)

この仮説では、a 創造の起源には唯一の弾みがある、b 弾みは生命のもの(「生命の弾み *élan vital*」)である、c 進化は分岐によって進む、いう三つの主張がなされている。この三点を念頭において、『進化』第1章の議論を見てみよう。

この章の中心をなすのは、旧来の進化説に対する批判的な検討である。その長大な議論を詳細にたどることは控え、ここでは結論だけを確認しておこう。ベルクソンは、「私たちの眼前で、自然は絶えず…まったく異なる胚発生の過程を経て同一の結果に達する」(EC 75-6)という事実を訴える。異なる進化の経路をたどったはずの生物が「構造の類似」(EC 63)を示すこと、つまり同じ機能と形態を有した器官を備えるという結果に対して、偶然生じた微小な変異の累積(ダーウィーン)、突然変異(ド・フリー

ス)、定向進化(アイマー)といった諸説は無力である。偶然的なものであろうとなかろうと、生物に対して機械的に働きかける力はこのような結果を説明できないのである。

そのため、「方向を定める内的原理」(EC 77)、つまり生命そのものに内在する推進力に訴えることが必要になる。しかし、この原理を個体の努力に還元した新ラマルク主義もまた退けられる。この説が依拠する獲得形質の遺伝には疑問の余地があるうえ、器官が複雑さを増していくことを説明できないためである。したがって、進化の原動力は個体ではなく「個体の努力とは別の形においてではあるが、深遠かつ環境から独立した」(EC 88)何ものかだということになる。

以上のような議論を経て、進化の原動力は「生命の一般的運動」(EC 103)に帰せられる。「ただ一つの同じ弾み」、「生命の弾み」という起源から分岐した生命の運動が進化のそれぞれの線において見出される、という仮説を受け入れることによってはじめて、遠く離れた動物種における器官の類似を理解できるというのがベルクソンの立場である。

こうして、上記の a、b、c はそれぞれ正当化される。しかし、進化が分岐という仕方ではなされることは自明ではない。分岐を欠いた進化というものを、少なくとも想定することはできるからである。

なぜ、ただ一つの弾みがただ一つの身体に刻み込まれ、その身体が無際限に進化するということにならなかったのだろうか。(EC 257-8)

このような問いの生じる余地がある以上、生物が複数の種に分かれること、それらがおのおの一定の形態をとることの理由が明らかにされなければならない。創造というものの性質が問われるのはこの場面においてである。

生命を「不断の創造」(EC 23)、「無際限に続けられる創造」(EC 179)、「純粋に創造的な活動」(EC 246)とただ呼ぶことには意味がない。その内

実が重要である。何かに働きかけるのでなければ、創造はそれとして姿を現さないだろう。生命は、みずからとは異質な何ものか、具体的には物質に作用することではじめて創造であることができる (EC 97)。

ベルクソンにとって物質性は「自己解体する se défait」(EC 246、強調はベルクソン。次の引用も同様) 流れであり、生命は「自己形成する se fait」(EC 246) 流れである。物質世界は「落下する錘」(EC 246) に喩えられ、生命は「物質が下った坂を上るための努力」(EC 246) だと言われる。生命が物質に働きかけなければならない以上、両者は逆向きでありながら相補的でもある。

このことはしかし、生命による創造が物質から抵抗を受けること、それによって「純粋な」(EC 246) 創造ではありえないことを示す。それ自体としては「絶対的な仕方 absolument ふるまう」(EC 246) はずの生命は、現実には物質によって妨害を受け、阻まれるため「絶対的な仕方 absolument 創造することができない」(EC 252)。創造の代償は有限性である。

実際、生命はひとつの運動であり、物質性はそれとは逆向きの運動である。これら二つの運動はそれぞれ単純なものだ。ある世界を形成する物質は未分離な流れであり、物質のうちに諸生物を切り抜きながらその物質を横切っていく生命もまた未分離である。これら二つの流れのうち、後者〔物質の流れ〕は前者〔生命の流れ〕を阻む、それでも前者は後者から何かを得る。このことから二つの流れに折り合い modus vivendi がつくのであり、それこそが有機化である。(EC 250)

進化とは、生命と物質という二つの「流れ」の間で生じた「抗争 lutte」(EC 245) の結果に他ならない。「物質が弾みに抵抗した結果」(EC 255) として、「ただ一つの弾みがただ一つの身体に刻み込まれ、その身体が無際限に進化する」ことは起きず、進化の諸線は分岐する。また、「生物種がとる特定の形態とは、両者の「折り合い」の産物であり、生命が前進す

る力を失って「その場での足踏み *piétinement sur place*」(EC 105)あるいは「その場での旋回 *tourbillonnement sur place*」(EC 269)に転じた姿である。ここでは生命の運動は身体という物質が物質的環境に適応するための努力になっており、力のほぼすべてがそのために費やされてしまう(EC265)。「それぞれの種は、生命の一般的な運動が自らを横切っていく代わりに、[自らのもとの]止まっているかのようにふるまう」(EC 255)。こうして、生物種は一般に「停止」(EC 255)と位置づけられる。

この議論の終着点は人間の特権視である。動物と人間とでは脳の構造が決定的に異なっている。動物の脳は環境に適応するためのメカニズムを組み立てて習慣を形成するが、その数は有限であり、まさにそのことによって自らが「自動機械」(EC 264)になってしまう。それに対して人間の脳は無際限のメカニズムを作り上げる能力を持つ。そのため「絶えず新しい習慣を古い習慣と対立させ、自動機械を分裂させることによって自動機械を支配することができる」(EC 265)。つまり、動物が物質に支配され翻弄されるのに対し、人間は逆に物質を自らのために利用する。しかし、そうした「本性の差異」(EC 265)は、人間が動物よりも相対的に優れていること、「地上の王者 *maître du sol*」(EC 135)であることを示すにすぎない。人間の「特権的な状況」(EC 269)はそのことにのみ存するのではない。

人間はそれ自体が一つの種であり、したがって他の動物と同じように創造が停止した点にある。しかし、その一方で人間だけが「生命の運動が無際限に続ける」(EC 266)ことができる。生命の創造する運動が種を「置き去りにする」(EC 130)のに対し、人間だけがその運動の担い手、あるいは運動そのものになることができる。こうした意味で、人間は「進化の存在理由」(EC 266)である。どのようにしてそれが可能であるのか、ここでは語られない(「直観」が手段となるのであろうが、少なくとも『進化』における記述は具体性に欠ける)。いずれにせよ、ベルクソンが人間の価値と存在意義についてこの上なく肯定的な見通しを立てていること

は明らかである。『進化』においてはオプティミズムについて一言も触れていないが、彼のオプティミズムがこのような生命観、人間観に由来することは間違いない。

第2節 停止としての人間種

『進化』が刊行された1907年、ベルクソンはジャック・シュヴァリエに対して次のように語っている。

私は自著の中で何かを悪と名指すことをしませんでした。しかし、まさにこの悪という観念から第三章の全体を着想したのです。それは、上昇一下降という二重の運動を示す進化から必然的に帰結する悪です。⁴

この発言を文字通りに受け取るならば、前節で見たようなオプティミスティックな人間像に帰着した『進化』の議論は、実は「悪」という観念に終始取りつかれていたことになる。しかし、ベルクソン自身も述べるように、『進化』において悪についての具体的な言及はない。それどころか、彼の著作のどの箇所でも詳細に論じられないまま、先に挙げた『二源泉』第三章の一節で唐突に悪の問題が浮上する。したがって、ベルクソンにおける悪を扱うことはそもそも困難なのであるが、ここでは「ペシミズム」を手がかりに迫ってみたい。

クレルモン＝フェランにおける講義によると、「ペシミズムは、悪が宇宙の中で最大の部分を占め、事物の総体は悪いものであると主張することである」(C I 382)。『二源泉』では、このペシミズムは無力さに起因するとされる。

4 Chevalier et Bergson (1959), p.15.

飢饉が避けがたく、何百万人もの不幸な人々が餓死するとき、いったい何をなしうるというのだろうか。ヒンズー教のペシミズムの主たる起源はこの無力さである。完全な神秘主義は行動である以上、インドがこの神秘主義の終着点まで進むのを妨げたのはペシミズムである。
(DS 239-240)

神秘主義については後述するとして、ここでは以下の点を確認しておこう。避けがたい飢饉に見舞われた場合のように、外的状況があまりに過酷なものであるとき、人々はその状況に立ち向かう術をもたない。無力さとは行動の不可能性であり、より正確には状況に対する適切な反応の不可能性である。そして、「生命は可能なかぎり行動へ向かう」(EC 129)のである以上、無力さは生命の本来的なありかたを妨げるものでもある。

この無力さがペシミズム、つまり「事物の総体は悪いものである」という信念をもたらすのであれば、生命そのものが求める行動に対して障害となるものをさしあたり「悪」と呼ぶことができるだろう。本節では適切な反応とそれを脅かすものについてベルクソンの立場を検討しておこう。

『物質と記憶』(1896)の前後から、ベルクソンは行動することと状況に対して適切な仕方で反応することを同一視している。これは状況が物理的な環境であろうと社会であろうと変わらない。外界の知覚は「運動的活動への原初的問いかけ」(MM 43)として、社会は「圧力」(DS 2)あるいは「責務の全体」(DS 13)として現れる。前者は誘い、後者は強制という違いこそあるが、いずれにせよ状況自体が適切なふるまいを求めるものとして現れることに変わりはない。

ベルクソンは反応が適切になされている状態を「平衡」(MM 89)と呼んでいる。平衡とは、個人が周囲との間に結ぶ関係であり、個人の心身の健康でもある。人間は行動を通じて自分以外のものとの間に平衡を保ちながら、自分自身の平衡を保つことによって生活している。これは人間が選

択した生き方ではなく、以下に挙げる理由でそうすることを余儀なくされたものである。

第一に、社会と個人は「相互に条件づけている」(DS 210)。個人は要求に応えることで社会を維持し、社会は要求そのものであることによって個人を支える。それだけではない。『二源泉』の冒頭で示されるいくつかの例(DS 9-11)は、個人が社会を離れては生きられないこと、個体的自我のうちに社会的自我が入りこんでいることを示す(DS 8)。

第二に、このような社会と個人のありかたは、生命によってもたらされている。「生命は分業する諸要素間の連携と階層である」(DS 123)。したがって、「社会的なものが生命的なもの根底にある」(DS 123)。個別の責務は偶然的なものでありうるが、責務の全体、あるいは責務によって個人が存在するという事は生命によっても与えられた必然である(DS 24)。「それ〔責務〕は、生命に最も一般的な諸現象と結ばれている」(DS 23)。

第三に、社会はどれほど歴史を積み重ね、洗練されたものになっても、根本的に変わることはなく(DS 21)人間の本性も不変である(DS 228)。人間が種である限り、生命によってもたらされた条件を乗り越えることはできない。

以上で見たように、ベルクソンは、人間が種である限り平衡を維持するという生き方しかできないと考えた。にもかかわらず、彼が『二源泉』第二章の多くの部分を費やして記述するのは、この平衡が絶えず危機にさらされているという事態である。平衡を脅かすのは知性であり、知性によって可能になる反省であり、反省によって生み出される様々な観念である。

人間は、自らの行動に確信が持てず、躊躇と手探りを重ね、成功への期待と失敗への恐れを抱きながら計画を立てる唯一の動物である。自分が病気にかかるものだということを感じており、また必ず死ぬということを知っている唯一の動物でもある。人間以外の自然においては、完全な平静さが実現している。植物と動物はあらゆる危険にさらされ

ているが、それでも永遠のうちで安らうのと同じように過ぎゆく瞬間に安らう。…しかし、そのように言うだけでは十分でない。社会生活を送るすべての存在のうち、人間は、共通善が問題となるときに利己的な関心に抵抗できず、社会の方針から外れることのできる唯一のものである。(DS 215-6)

自分自身という観念とそれにともなうエゴイズム (DS 126)、「死の不可避性」(DS 136) という観念によって意気喪失すること、「偶発事、予見不可能なもの」(DS 145) という観念に導かれる「リスクの感情 *sentiment du risque*」(DS 144) は、いずれも状況に応じた適切なるまいを困難にし、個人が社会および自分自身との間に維持していた平衡を乱す。そしてそのことによって「人間において生命の運動を減退させる *ralentir*」(DS 136) ことになる。

もっとも、実際に人間が経験するのは、平衡を「回復させる」(DS 135) 仕組みがすでに働いてしまっているという事態である。人間において機能は分岐しているが、人間という種を創造した生命の活動は一つのものであり、一つの機能が突出することによって生じる「動揺と不具合」(DS 220) に対しては、それに対抗する働きが生じる。両者は「補いあい、打ち消しあう」(DS 220)。上で挙げた諸観念に対しては「妨害あるいは禁止する神」(DS 127)、「死後における生の継続」(DS 136)、「好都合な力能 *puissances favorables*」(DS 146)「援助する力」(DS 146) といった諸表象 (イメージ) がおのずと生じ、人間を行動へと引き戻す⁵。「イメージによる観念の中和化」(DS 137) である。これらのイメージは、知性によってもたらされる平衡の危機に対する「自然の防御反応」(DS 127, 137, 146) に他ならない。

以上のような議論によってバルクソンが示すのは、一方で個人と社会

5 「それ〔表象〕は、自らに伴う行動と一体化する *forme un amalgame*」(DS 211-2)。したがって、この表象は「観念運動的 *idéomotrices*」(MM 223) と言われる。

の相互依存が概ね機能するということ、他方でそれが失敗する可能性にも開かれている（「イメージによる観念の中和化」が常に首尾よくなされるとは考えにくい）ということである。そもそも、平衡の乱れが生じる危険性がある場合にしか、平衡は問題とならないだろう。個人が適切なふるまいをできない場面は常に生じる。

では、ベルクソンにとって行動（適切な反応）への障害となり、平衡を乱し、生命の活動を妨げるような観念こそ究極の悪なのだろうか。実はそうではない。本節で見たような行動への障害を決定的な仕方でも乗り越えることは、少なくとも可能性として考えることはできる。それに対して、「耐え難い現実」（DS 277）と名指される悪は決して解消することができない。これについては後に触れる。いずれにせよ、悪は生命の本来のありかたを妨げることとかかわるという本節での見通しは維持される。

第3節 媒介としての神秘主義者

前節で見たのはベルクソンの、一概には否定的ではないが無条件に肯定的とも言い難い人間観である。他のいかなる生物とも異なり、人間においてのみ危機とその回避策が「打ち消しあう *s'annulent*」（DS 220）。人間の知性は、行動の障害となり生命の運動を停滞させるような諸観念を生み出してしまし、そうした観念を中和化する表象が同時に生じるものの、それは障害の「相次ぐ除去」（DS 207）でしかないため、根本的な解決には至らない。そして、このようなありかたは種としての人間の本性そのものに由来するものであり、そのままでは脱却することができない。人間はこうして「不安定な平衡のうちで生きる」（DS 241）ことを宿命づけられているように見える⁶。

しかし、ベルクソンは『進化』において、種というものが停止である

6 この点については Lapoujade (2010), p.89 を参照。

のに対して人間だけが前進を続けることができると説いていたはずである。『二源泉』第3章において、神秘主義は、こうした「[人間という]種に割り当てられた諸々の限界を乗り越えるような」(DS 233)努力として導入される。

生物種の一つである人間が種を超えることは「矛盾」(DS 249)であるため、そのような努力自体、困難を極める。もし誰にでも可能であるならば、生命は「袋小路に陥ったかのごとく」(DS 291)人間という種で停止してしまうことはなかったはずだ。したがって、神秘主義は「実現できないことを実現する *réaliser l'réalisable*」(DS 269) 営みであり、その一次的な担い手は「神秘主義者」と呼ばれる少数の傑出した人物に限られる。彼らは「その本質自体によって」(DS 226) 例外的な存在であらざるを得ない。ここではベルクソンが描写する神秘主義者像を三点にまとめてみよう。

第一に、彼らは「創造的弾みと一体化する努力」(DS 238)をなすことができる。それは、「生の弾み」をその根本まで遡り、それを「種に代わって取り戻す」(DS 285) 試みである。さまざまな異常な状態（「見神」「忘我」など）がこの努力に付随することはあり、そのため、彼らは「平衡を欠いた者 *un déséquilibré*」(DS 259)に見られてしまうこともある。しかし、それらの状態が神秘主義の本質であるわけではまったくなく、神秘主義者自身にとっても重要ではない (DS 262)。

というのも、神秘主義者を普通の人間から際立たせているのは突出した行動力だからである。彼らは「解決すべき問題を解決済みのものと想定することから出発する」(DS 306) ために、普通の人間であれば問題の重大さ、深刻さ、複雑さによって行動への意志が潰えてしまう場面でも、迷いも躊躇も示さずにふるまうことができる。もちろん知性を欠くわけではないが、知性による事態の把握によって行動が妨げられることはない。こうして神秘主義者は「行動する人々 *des hommes ou des femmes d'action*」(DS 259)として姿を現す。多くの人が「不安定な平衡のうちで生きる」ことを余儀なくされているのに対して、彼らは「高度な平衡 *équilibre*

supérieur」(DS 243) を実現している。これが第二点である。

しかし、ベルクソンにとって重要な点は、彼ら自身の行動そのものというより、行動を通じて他の人間に及ぼす影響である。神秘主義は個人的な営為ではなく、常に「大衆 la masse」(DS 225) とともにある。神秘主義者には「伝道の意欲」があり (DS 247)、「人類を導く」(DS 291) ことを望む。そして、その言葉に触れた者は「覚知できないほど微かにこだまする何か」(DS 226) が自らの内にあることを知る。この「微かなこだま le faible écho」を聞いてしまった者は「無関心なままではいられないだろう」(DS 228)。彼は自分が動かされてしまっていること、神秘主義者に牽引されてしまっていることを、事後的に意識するのである。多くの人間が神秘主義者と同じ程度にとはいかないまでも、同じ道を通して創造へと導かれる⁷。こうして人類の「根本的な変形」(DS 250)、つまり種というありかたを乗り越えることが目指される。これが第三点である。

神秘主義を導入したことによって、オプティミズムに一応の説明がつく。単純に図式化すれば以下になるだろう。まず、「生命の推進力はオプティミスティックなものである」(DS 146)。そして、その推進力を引き継ぐことのできる神秘主義者たちは「偉大なオプティミスト」(DS 306) に他ならない。種の宿命として「生の弾み」から遠ざけられていた人間は、彼らを「介して」(DS 285) 再び創造へと向かうことができる。こうして「生命は人間にとって少なくとも他の種にとってと同じくらい、否、それにもまして望ましいものですらある」(DS 224) と考えることができる。神秘主義者は、種としての人間を置き去りにした生命一般と人間とを媒介するものとして導入されている。

しかし、そのように理解した場合、ベルクソンが描く神秘主義者の活動には二つの疑問が残る。上で整理した神秘主義者の特徴、すなわち①特

7 「神秘主義の道を最後までたどるような魂の傍らには、その道のりを少なくとも部分的に踏破するような多くの魂がある。意志の努力によるにせよ、天性の素質によるにせよ、どれほどの人々がそこで何歩か進んだだろう」(DS 260)。

殊な天分を持っていること、②すぐれた行動人であること、③その行動を通じて普通の人間を創造へと牽引することのうち、バルクソンは①と②、①②と③が容易にはつながらないことを繰り返し強調しているからである。天分をもった個人が生まれても、過酷な物理的条件のため (DS 240)、あるいは本人が観照に満足したため (DS 234)、その努力が行動へと結実しない場合がある。また、「一定数の人たちは、間違いなく神秘主義的経験に対して完全に心を閉ざしており、その何かを感じ取ることも、想像することも全くできない」(DS 261)。そして、「神秘主義は、その何かを感じ取らなかった者に対しては何も語らない、絶対に何も語らない」(DS 251)。したがって、神秘主義者が傑出した行動の人であるにしても、彼らがすべての人を牽引することはできない。このことは、神秘主義者の媒介による人類の「根本的な変形」など不可能であると、バルクソン自身が認めていることを示さないだろうか。

そもそも、「神秘主義者」と呼ばれる人々は実際に何をしたのだろうか。『二源泉』の記述に「どこか漠然としている」という印象が残るとしたら、それは神秘主義について多くのことを語っていながら、神秘主義者たちの具体的な業績についてほとんど触れていないからではないか。神秘主義の可能性と具体性に関するこれらの疑問に、バルクソンの立場からはどう答えられるだろうか。

神秘主義者が「人類のうちに突如現れた」(DS 251)と想定することは、「物事を大いに単純化した」(DS 251)見方であり、また神秘主義が「すべての人に即座に伝播されること *propagation generale immédiate*」(DS 250)など明らかに不可能である。実際には、神秘主義は多くの場合既存のメディア、既存の言説に入り込み、「薄められた状態で」(DS 225)当の神秘主義者は姿を見せないまま世の中に少しずつ浸透していく。そのとき、以下のような事態と似たことが起きる。

無能な教師が、天才的な人々の創造した学問を機械的に教えることで、

ある生徒のうちに当人自身は持たなかった資質を呼び起こし、意識せぬままこの生徒をこれらの偉人たちに比肩するものに変容させるだろう。偉人たちは教師が伝える言葉 *méssage* のうちに不可視のまま現前している *invisibles et présents*。(DS 228、強調は引用者)

カリスマ的な指導者が現れて直接民衆を先導するような場面は、非常に限定的なものだろう。ベルクソンはそれよりも浸透の効果を重視する。社会は神秘主義の影響を受けて既にある程度変化してしまっており、その中で生きる人間も（多くの生徒が「無能な教師」の平凡な口調によって天才の言葉を伝えられるように）既存の言語や風習のなかで神秘主義と接してしまっている。したがって、神秘主義が可能か否かということは問題になり得ない。

具体性についてはどうだろうか。ベルクソンはキリスト教の神秘主義者たちに「完全な神秘主義」（DS 240）を見て取るが、その時ですら「さしあたりこの人たちのキリスト教を脇に置き、内容を抜きにして彼らにおける形式を考察しよう」（DS 240）と提案する⁸。彼にとって、神秘主義者たちが具体的に何をしたかということは（どうでもよいとは言わないまでも）決定的な問題ではない。彼らがそれぞれ個別に生命の源泉に触れ、突出した行動力を発揮し、人を動かしたという事実の方が重要なのである。神秘主義者に呼応した者にも同じことが言える。心を動かされるということは、神秘主義者を模倣することではないし、何か特定の行為をなすよう

8 ベルクソンは聖パウロ、聖テレサ（アビラのテレサ）、聖カタリナ（シエナのカタリナ）、聖フランチェスコ（アッシジのフランチェスコ）に加えてジャンヌ＝ダルクの名を挙げている。具体的な業績という面から見ると一人だけ種類が異なっているように見えるが、「構想を抱き現実する並外れたエネルギー、大胆さ、力能」（DS 241）は全員に共通している。ベルクソンが「形式」と呼ぶのはこのような行動力である。したがって「ジャンヌ＝ダルクの例は、形式が内容から分離可能であることを十分に示すだろう」（DS 241）と言われる。

差し向けられることでもない。

創造へと向かう人々は、具体的にはそれぞれまったく異なることを行っている。共通するのは、「歓喜」である。「意識と生命」においてベルクソンが挙げた例を見よう。「商売を展開する商人、事業が繁栄するのを目にする工場主」(ES 23)は「前進する企業を作り上げ、何かに生命をもたらしたという感情」(ES 23)に、芸術家は「生命力と持続力のある *viable et durable* 作品を生み出した」(DS 24) ことへの確信に「歓喜」を感じる。「前進する企業」「生命力と持続力のある作品」は成長を続けることによって、みずからを生み出した創造という営みを継続する。歓喜とは、このように生命を持つものを創造したことに伴う感情であり、そしてそれは「生命の弾み」に触れた神秘主義者が覚えるものに他ならない (DS 225)。歓喜は「快樂と苦痛の彼岸に位置する」(DS 277) ものであり、否定と対にならない絶対的な肯定である。この歓喜はオプティミズムを特徴づけるものになる。これについては次節で検討しよう。

第4節 経験的オプティミズムと悪

『二源泉』第三章の終盤で、オプティミズムと悪について論じられる箇所は錯綜している。ここでは議論をオプティミズムに対する三つの挑戦として整理し、それらを順に検討してみよう。

第一に挙げられるのは、人間の本性を認識することに由来する恐れである。人間は、広大な宇宙の中で自らが「取るに足りないもの *peu de chose*」(DS 274) であると、また宇宙の「複雑さ」に比して人格というものがあまりにも「単純」(DS 275) であると常に考えてきた。この卑小さと単純さの認識は、人間の「存在理由」(DS 275) を疑わせるのに十分である。

実は、卑小さについてはそれ以前にも似た例が取り上げられていた。そこでは、卑小さについての思考は「自らを取り囲むものの意図」(DS

186) という「対立するイメージ」(DS 186)が生ずることによって対処がなされると説かれていた。しかし、この箇所ではイメージではなく、事実認識の誤りや相対性を示すことが対抗手段となる。人間が自らの存在する場を身体に限定してしまうのは、この身体を介して活動することに由来する「慣習」(DS 274)であるにすぎない。その慣習から解放されれば「私たちは…自らが知覚したすべてのもののうちに、現実存在している」(DS 275) ことがわかるはずだ。また、宇宙が複雑に見えるのは、形成され終わったものの諸要素を一つ一つ列挙しているからであり、それを形成する作用という面から見れば「全体は単純」(DS 275) なものとしてとらえられる。なるほど宇宙を構成する複雑な諸部分は実在するかもしれないが、それは「重要さの証ではない」(DS 276)。オプティミズムを擁護する立場から、ベルクソンは慣習的な思考と手を切ることを求める。適切な、つまり真に経験に忠実な「角度 bias」(DS 275) から見ることであれば、人間が無価値だという恐れなど消失するというのがここでの対応である。

第二に、数限りない苦痛の存在が検討される。これはいくつかの例を挙げて退けられる。①動物の苦痛は人間ほど強くも長くもない(DS 276-7)。②夢の中で感じられた苦痛は現実の苦痛と同一視できない(DS 277)。③苦痛は、それについてなされる反省によって「無際限に延長され増大させられる」(DS 277)。このように列挙することで、ベルクソンは「苦痛の一覧表」(DS 276) のうちに提示されるものの大半を①ほとんど感じられない苦痛、②感じられはするが、実際の経験に基づかない苦痛、③感じられ、経験に基づくが、それに伴う反省によって水増しされた苦痛に分類していると考えられる。これらはいずれも苦痛を過大評価したものとみなされ、オプティミズムに対する脅威とはなり得ないと判断される。

第三に、この、「苦痛の純化」とも呼べる作業を経た後で、最後に残るのが「耐え難い現実」(DS 277) としての苦痛である。

わが子の最期を看取ったばかりの母親を前にして、彼〔哲学者〕は何

を考えるだろうか。否、苦痛は耐えがたい現実であり、たとえ実際の姿に引き戻された *réduit à ce qu'il est effectivement* ものではあっても、悪をアプリオリにより小さな善と定義するのは、支持しがたいオプティミズムである。(DS 277、強調はベルクソン)

悪の「実際の姿」、「耐え難い現実」としての苦痛とはどのようなものだろうか⁹。ベルクソンは「意識と生命」において、先に引用した工場主や芸術家の例と同じ個所で以下のように述べている。

創造が豊かになればなるほど、歓喜は深くなります。子を見つめる母親は歓喜に満ちています¹⁰。肉体的にも精神的にも、その子を創造したと感じているからです。(ES 23)

繰り返すが、ベルクソンにとって創造とは、何かを一度生み出して終わってしまうものではなく、生み出したものの成長・発展によって続くものである。創造が続くというより、続くものこそ創造だと言い換えたほうが適切かもしれない。子が育つことは母にとってまさに創造の継続であり、

9 ベルクソンはここで苦痛が悪であると明示的には述べていないものの、そのように含意されていることは明らかだと思われる。しかし、苦痛と悪を区別する解釈もある。そのような解釈として Worms 2008 参照。

10 ベルクソンは『進化』において次のように述べる。

…時おり、それら〔諸生物〕を運ぶ不可視の息吹が物質化し、私たちの目の前に束の間姿を現すことがある。私たちは母性愛のいくつかの形を前にして、こうした息吹が照らし出されるのを眼にする。この母性愛は大部分の動物において非常に印象的で感動的なものであり、植物の種子に対する配慮にまで観察されるものだ。(EC 129)

こうした母性愛に対する過剰とも映る思い入れが何に由来するのかわかりませんが、控えめに言っても万人に受け入れられるものではないだろう。

成長が進むほど創造は「豊かに」なる。このような創造観から考えると、子の死に直面することは、創造とそれに伴う歓喜から決定的な仕方では遠ざけられてしまうことと等しい。以上の理解が正しければ、ベルクソンが悪の「実際の姿」と呼ぶものの内実は、創造からの断絶である。

このような悪を前にして、「悪をアプリアリにより小さな善と定義する」オプティミズムは、経験の裏付けを欠いているために支持しがたい。ベルクソンはこのすぐ後で、「経験的オプティミズム」を提示する。これがオプティミズムに関する彼の最終的な立場である。

しかし、経験的なオプティミズムというものがある。それは単に二つの事実を認めることに存する。まず、人類は生命を大切にしているのだから、生命の総体をよいものだと判断しているということ。次に、夾雑物がなく快樂と苦痛の彼岸に位置する歓喜、神秘主義者において決定的な魂の状態である歓喜が存在するという。この二つの意味、二つの視点においてオプティミズムは認めざるを得ない *s'impose* のであり、そのために哲学者が神の大義を擁護するには及ばない。(DS 277)

ベルクソンが挙げた「二つの事実」は α 純粋な歓喜が存在すること、 β 人類が生命を大切にしていることだった。これまでの議論を踏まえると、 α が示すのは以下のようなことだ。生命の源泉と直接触れることのできる特権的個人がおり、その人たちは人間の価値と存在意義を純粋に肯定することができる。例外的とはいえそうした個人が存在するのだから、人間には自らの価値と存在意義を肯定することが全く不可能なわけではない。 β は、人間が自己の価値と存在意義をある程度は実際に認めてしまっている（人によって程度に差はあるだろうが）ということを表す。これら二つの「事実」を認識しているということは、人間が自らの価値と存在意義の肯定は不可能ではないという信念を持ち、その方向に多少なりとも足を踏み

入れている自覚を抱いていることと等しい。ベルクソンの経験的オプティミズムは、このような信念と自覚のことを指すというのが本稿の立場である。

おわりに

ベルクソンの経験的オプティミズムは「誰もが必ず生命と人間の価値を全面的に肯定できる」という大それた主張ではない（そのような主張は独断によってしか成り立ち得ず、「子の最期を看取った母」のような経験の前では無力をさらす、というのがベルクソンの立場である）。それに比べればむしろ相当慎ましいものである。人間の価値と存在意義が完全に否定されるのでない限り、そして人間が自らの価値と存在意義を肯定する方向へほんのわずかでも向かっている限り、人間はオプティミストだというのだから。しかし、まさにそのことによってオプティミズムは「認めざるを得ない」ものになる。

経験的オプティミズムは悪と矛盾しない。たとえ悪が存在したとしても、すべてのものが全面的に悪いのでなければ（つまり肯定する余地が全く残されていないのでなければ）、人間はオプティミストでいられるからである。

文献表

Chevalier, Jacques, et Bergson, Henri. 1959. *Entretiens avec Bergson*. Paris: Plon

Lapoujade, David. 2010. *Puissances du temps*, les Éditions de Minuit.

Warterlot, Ghislain (ed.). 2008. *Bergson et la religion. Nouvelle perspectives sur les Deux Sources*, Paris, PUF.

Worms, Frédéric, «Terrible réalité» ou «faux problème»? Le mal selon Bergson, in Warterlot 2008.

石井敏夫 (2007), 『ベルクソン化の極北』, 理想社

(にしやま・てるお 慶應義塾大学文学部非常勤講師)

L'optimisme empirique et le mal chez Bergson

Teruo NISHIYAMA

Le but de cet article consiste à éclaircir, dans la philosophie bergsonienne, le sens de la notion de l'optimisme empirique et son rapport avec une autre notion, le mal. Le troisième chapitre de *Les deux sources de la morale et de la religion*(1932), se présente comme une défense de l'optimisme, c'est-à-dire l'idée que la vie est bonne dans son ensemble. Certes, il y a des souffrances innombrables qui couvrent le domaine de la vie. Mais la plupart de ces souffrances sont exagérées au yeux de Bergson. Donc, elles n'arrivent pas à vaincre l'optimisme. Toutefois il y en a une que ressent une mère qui vient de voir mourir son enfant. C'est une terrible réalité, le mal réduit à ce qu'il est effectivement. Aucune optimisme, y compris l'optimisme empirique que soutient Bergson, n'est capable de soulager cette souffrance. L'optimisme bergsonienne prend la forme modeste: La vie est bonne dans son ensemble, même si l'y a des maux, à moins que tout soit mal.